
宿借り

くつした

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宿借り

【Nコード】

N3400S

【作者名】

くつした

【あらすじ】

安尾はアパートの部屋に現れた女の幽霊に惚れてしまう。惚れた弱みで女の幽霊の手伝いをしているうち、今度は自称霊能力者だという幽霊まで現れる。ドタバタとしているあいだに友人の椿の様子がおかしくなる。いったい安尾の日常はどうなってしまうのか。

安尾とキヨウコ 1

安尾が彼女とはじめて出会ったのは扇風機が壊れた日だった。

あれは出会ったと言うべきなのか、出くわしたと言うべきなのか。安尾は出会ったと思っていたがつているが、きっと傍から見ればただ出くわしただけなのだろう。相手が相手だけに、出くわしたというのはとても適切である。

(×) 彼女と出会った

(○) 彼女と出くわした

安尾の心情的には前者であり、かつ、運命の出会いというところだろうが。

安尾がこのアパートに越してきたのは、つい五日前のことである。大学までは実家を通っていたのだが、一人暮らしをしてみたいという願望を抑えきれず、大袈裟な量の荷物でやってきたのだ。その荷物のうちの一つが扇風機であったのだが、すぐに壊れてしまったというわけだった。クーラーのない部屋で猛暑を過ごす過酷さを、安尾は一人暮らしを始めてたったの二日目で思い知った。熱帯夜になされ寝不足になってしまったのだった。ちなみに一日目は初めての一人暮らしに興奮して眠れなかっただけである。

真夏の渦中、セミがわんわんと騒ぎたてる時期である。そんな時期にクーラーのないアパートの一室で扇風機を失うということは、蓮池のふちから血の池へ突き落とされるようなものである。切れることのない蜘蛛の糸となるべきものを探さねば、いつか干からびてミイラになるに違いなかった。

扇風機が壊れたことを友人の椿に嘆くと、古い扇風機を譲ってもらえることになった。椿のアパートから古びた扇風機をかついで自転車をこいでいると、まるで局地的な豪雨にさらされたかのように

汗でぐつしよりと濡れた。安尾は部屋に戻ると椿から譲り受けた扇風機の梱包を解いた。扇風機はところどころに錆びていて、みの虫のごとく大量の埃をその身にまとっていた。

シャワーを浴び、一緒に扇風機の枠や羽を洗おうとしたのだが狭い浴槽ではうまくいかなかった。仕方がないので部屋の外でバケツに水を汲んで洗うことにした。玄関の戸を開けたまま部屋と外の境界に腰をおろし、バケツから出した雑巾で扇風機の羽を力任せにぬぐった。

彼女が出現したのはそのときである。

まさに出現という言葉がぴたりと当てはまる登場の仕方だった。バケツの中で雑巾の埃をとっているときだ。灰色に濁ったバケツの水に、己以外の何者かが映っていることに気がつき、安尾は顔をあげた。

目のまえに、安尾の手の動きを覗き込むようにしてバケツを見下ろす女がいた。二十半ばだろうか、短い髪の、すらりとした長身の女だった。いつの間に近付いてきたのか、いつからそこにいたのか、安尾にはまったくわからなかった。安尾は反応に困り、作業の手を止めてぽかんと口を開けた。

安尾の反応が面白かったのか、女は頬を緩ませて穏やかに笑った。その笑みが安尾の胸になにかを突き刺した。直後、激しい衝動が安尾の胸を揺さぶった。あまりの衝撃に身体がぐくぐくと揺れたのではないかと安尾本人が思ったほどである。実際には、安尾はだしなく口を開けてぽかんとしているだけであるが。

安尾はハッとし、胸のうちに突如として現れた己の感情に戸惑った。いったいこれはなんだ、どうしたことなのだ。

後々になってよく思い返せば、このときに彼女に惚れてしまったわけであった。もう骨抜きである。安尾が恋心というものに感情を激しく左右されるのは、この世に生を受けて二十年、初めてのことであった。女の顔は、街角ですれ違うだけでは三步あるけばすぐ忘れてしまいそんな平凡なものである。そんな女の、いったいなにに

やられたのかといえ、それはもう言うまでもなく笑顔である。穏やかに笑ったその微笑みに安尾はコテンコテンにやられたわけである。なんというべきか、気丈ながらも儂げな笑顔だった――安尾は後にそう語る。

微笑んだ女は顔をあげると、安尾とバケツを回るようにして通り越し、玄關から部屋へと入って行った。

入っていったのは安尾の部屋である。もちろん、お邪魔しますだの入りますだのといった言葉はなかった。堂々と、無断で入っていたのである。

あまりにも突然のことだった。安尾は顔と視線だけで女の後を追ってはいたが、なにもすることができなかった。肩越しに振りかえって女を見るだけである。なにかをしようと思うことさえなかった。靴を脱ぐ女の後姿を眺め、部屋に足を踏み入れる女を眺めた。呆けたように女の動きを目で追うことしかなかった。

女はずんずん部屋へ入っていく。後ろで切りそろえられた髪は短く、白いうなじが眩しい。身体の線が良く見えるピンクのＴシャツを着、青いデニムのズボンをはいている。Ｔシャツはあまり似合っていないように見えたが、ズボンは足の長い彼女にはパズルのピースでもはめるかのようにピッタリと決まっていた。安尾の好みとしては、彼女の身体つきは少々痩せすぎのきらいがあった。肉つきが足りない。が、歩くたびに揺れる尻をしっかりと鑑賞している。呆けてはいたものの、そこは悲しいかな、安尾も男であった。

ややあつて安尾は我に返り、我が牙城の闖入者に対応をせねばならないということに気がついた。勝手に部屋へと侵入した女は、勝手に部屋をうろつき、勝手に網戸を開け、勝手に伸びなんぞをしている。いや伸びをするのは個人の自由であるが、どこまでも図々しい。まるで我が物顔である。男の孤独な部屋に初めて来訪する女性とは、借りてきた猫のように物静かにして然るべきではなかるうか。しおらしくしているべきなのではなかるうか。そうであるべきなのだ。

安尾は立ち上がり、声をかけようとした。が、なんと言えいいのかわからない。不法侵入ですよ、なにしているんですか？　そう言えればいいのだろうが、頭の中で上手く言葉が組み立てられない。「ちよつと……、そのお、あのですね」

女の堂々とした佇まいに、むしろ安尾が借りてきた猫のように萎縮してしまっている。惚れた弱みで相手に強気になれないということも大きいだろう。なにせほとんど一目惚れである。おいこらめえ、などと口が裂けても言えるわけがない。

女は安尾の声が聞こえなかったのか、腰に手を当てて窓の外を眺めるばかりでこちらを見向きもしない。

安尾がたまりかねてもう一度声をかけようとしたときである。

唐突に、女の姿が消えた。霧が晴れるようにスウとゆったり消えていったのではなく、切れかかった電球が己の最後を全うしようと明滅を繰り返したのでもなく、薄い鉛筆の線を消しゴムで消す様に上から下あるいは下から上に消えたのでもない。部屋の明かりを消すかのように、パツと消えた。蛍光色の明るい部屋から、真っ暗な暗闇へ。女から、無色透明へ。スイッチはどこだ？　あるわけがない。

「は？」

と安尾は言った。思わず出てしまった。出さずにはいらなかった。

直後、安尾の首筋から背中 of 恥骨あたりにかけて痺れが走った。身体がぶるつとふるえ、顔が小刻みに揺れた。身体中の汗が一気にひくのを感じた。

鼓動が早まっているのが嫌でもわかる。

外から部屋を覗き込んだままであった安尾は、慌てて扉を閉めた。勢いが強すぎたため、扉はあまりにも大袈裟な音をたてた。

「うわ、うわ、うわ」

わけのわからぬことを言い、振りかえって逃げだそうとした。踵を返した際にバケツに足を引っ掛けるがなんとか持ちこたえる。代

わりにバケツが倒れて濁った水が飛び出し、扇風機の羽が転がる。それでもかまわず、逃げだした。

結局その日は大学の友人の家まで逃げ、アパートに帰ることはなかった。友人の家では三人麻雀をしていたため、四人目として快く迎えられた。初めのうちは怯えが抜けない安尾であったが、良い手ばかりが続き、次第に麻雀にどっぷりと浸かっていった。そうして友人の家で夜を徹して麻雀を続けたのだった。朝日が顔を出すと同時にアパートへ帰ることにしたのだが、疲れと、心持ち重くなった財布のおかげで消えた女に対する恐怖は薄れていた。

あれは、そう、見間違いだっただ。もしくは白昼夢というやつだ。幽霊なんぞいるはずがない。

そんな風に思いこんではみたものの、納得することはできない。安尾は部屋のドアノブを見つめている。己の部屋の前である。手をかけるべきか否か。いやもちろんこのドアを開けて部屋に入り敷きっぱなしのほこり臭い布団に身を委ね、いざ夢の国へ参らんとするべきである。そうしたいのである。眠くて眠くてたまらない。

あつ、と今更になって気がついたことがあった。鍵をかけ忘れている。このドアを開けたら幽霊ではなく泥棒がいるかもしれない。しかし、もしかするとその方が気が楽かもしれない。

一度深呼吸した後、安尾は己を奮い立たせ、ついにドアノブを回した。回しきった後、十秒程そのままにし、それからバツと勢いよくドアを開けた。中はもぬけの殻であった。

開けたドアに手をかけたまま、安尾はほうと溜息をついた。その息は安堵と落胆の色に染まっている。複雑な心境であった。幽霊がいなくて良かった。やはり見間違いだっただ。幽霊などいない。けれど、でも、やっぱり、その……、あの人かわいかったなあ。

部屋に入った安尾は網戸が開けっ放しにしてあることに気がついた。蚊が入ってきてしまう。いや、きつとすでに何匹か侵入しているに違いない。あーあ、どうして網戸を開けてしまったのだろうか。

網戸を閉めた後、扇風機をつけ、風量を強に設定してから敷きっぱなしの蒲団に倒れこんだ。徹夜で遊んだせいで眠いのだが、蚊に起こされることになるんだろうな、そんなことを思いつつ、目を閉じる。

昨日、逃げる際に部屋の外で倒したはずのバケツが洗面所に戻っていることなど安尾は気がつきもしなかった。分解して掃除していたはずの扇風機がきちんと組み立てられていることさえ気がつきもしない。安尾が先ほど電源をつけた扇風機こそ、つい一時間ほどまえに掃除されて組み立てられたばかりのものだというのに。

椿とX 1

Xは自分が何者なのかを知らなかった。まあ、人間じゃないことは確かであり曲げられない事実である。ただそれはとても残念なこととで、できれば人間でありたいなあとXは思うが、人間ではないものとして生まれてきた以上は諦めるしかない。事実を湾曲し続ける人間が社会様にはいるらしいのだが、Xが人間ではないという事実を曲げることは到底不可能だった。どう足掻いたところでタンポポが象になれないのと同じで、今のところ、Xはもはや人間にはなれない。今のところ、というべきか、今後もできるかどうかは甚だ疑わしいが、いや、もしかすると世間様には公開してないだけで本当はできるのかもしれないが、まあきつと、できない。できるというなあ、などとXは幾度となく思うが、できないので仕方がないのである。できないものを羨んだり期待したところでほんとと疲れるだけだということは、ここ数日で痛いほど思い知らされた。というよりも、実際に文字通り痛みも感じたわけなので、どちらかといえば羨んだり期待するということは億劫になってきてしまっている。けれども思考する生物である以上（Xは思考する生物なのである、とX自信が思っているだけで事実是不明）羨望や期待が無くなることはない。誰にとっても他人の庭の芝はよく映えるものなのである。そうして、Xは億劫だ億劫だと思いながらもむやみやたらに他者を羨んだり恨んだりして結局は痛い目を見て日々を過ごしている。なんにせよ、人間であつたのならは素敵だろうなあと思うXはとても人間らしい考えを持ちながらも人間ではなかった。そして、どうやら人間になることもできないのである。ゾウムシがタンポポになれないように、Xも人間になれないわけなのだが、Xは人間の研究をしている。研究といっても、フラスコをゆらりと振ってみたりノートに幾何学模様のような数字を書き込んだりするわけではないので、それはただの豪語になってしまいかもしれないが、ともあれ常日頃

から人間の観察を怠らないのである。もつとも、Xが日々の行動としてやれることは残念ながら人間の観察くらいなもので偉そうなことは言えない。さらに言わせてもらえば、残念ながらXが常に観察できるのはたった一人の人間であり、その人間は残念ながら、残念な部類の人間であった。残念残念と言うとその残念な人間がかわいそうになつてくるかもしれないものだが、残念なものは残念なので仕方があるまい。かくして、残念ながらもXは常日頃から残念な人間を、残念だなあと思いつながら観察しているのであった。なんにせよ、X自身も自分のことを残念な存在だと思っているのでちよいどいいのかもしれない。生きるつていうことはそんなものなのでしょう。

残念な人間とは如何なる者であるか。

ここに一人の人間がいる。残念な人間としては非常に優れた、模範的な残念人間である。

身長162センチ、体重53キロ。成人した男性にしてみれば身長は低めで痩せ型である。学生の頃は運動部に入っていたが、幽霊部員としての活動に周囲が溜息をつくほど熱心だったため体力はない。格好つけるために吸い始めた煙草が辞めたいと思つてもなかなか辞められない。視力は弱く、流行の、縁が黒くて太い眼鏡をかけているが似合っていない。コンタクトレンズは怖くて試したことがない。パーマをかける勇気がないために髪の毛はいつも整髪料でベタベタになつており、それを見て快く思わない人がいるということに気がつかない。疲れたり嫌なことがあるとすぐにチツクの症状が出る。腹が弱く、刺激物を食べるとすぐに下痢をすることを悩んでいる。そのくせ、人にそれを話すときはなぜか誇らしげになる。おれ、腹が弱いんだよね、まいっちゃうよハッハッハ。二十一歳になるが就職歴はなく、アルバイトを続けている。職場では、アルバイトとしては社員に次ぐほど長時間働いているしそれなりの仕事を任されるが、社員にならないかと問われる程信用されてはいない。信

用されていないことを知らず、これだけの仕事を任されている俺はアルバイトのくせに偉いのだというプライドを持っている。ただ単に他のアルバイトが役に立つ程育っていないだけである。趣味がない。漫画やゲームをある程度やるしテレビや映画をある程度は見るが、履歴書の趣味・特技欄に書ける程見たり読んだりしているわけではない。スポーツも学校を卒業して以来やった試しがないし、音楽もヒットソングくらいしか聞かない。家で何をしているのかと言えばパソコンをつけて「何か楽しいものはないか」とインターネットの海を彷徨っているだけである。だからといってプログラミングができたり、ホームページ作成ができたりするわけでもなく、ただただインターネットを彷徨い続けて結局最後には「楽しいものなどなにもなかった」と苛々してパソコンの電源を落とすだけなのである。

この模範的な残念人間は、Xが観察を続けた結果の結論であり、必ずしも正しいとは限らない。Xにとっては模範的な残念人間だということだ。ただ、その人間に対する世間様の評価とXの評価にはそれほどズレがないであろう、とXは考える。

平均的な顔立ちだが、友人たちのあいだで「まあまあいいんじゃない？」という意見を一度か二度くらい得てしまったがために己の顔は実は良い部類に入るのではないかと信じて疑わない。テレビに出られるような顔ではないにしろ、控え目に見ても平均以上ではあるのではないか、自分でそう思いこんでしまう思うわけである。実は格好良い顔立ちをしているのだと信じているくせ、自信を持たず、この世に生を受けてから一度も性交渉に至るまでの関係を築けた女性がない。世間様でいうところのいわゆる彼氏彼女の間柄になれたことは一度だけあったが、彼のあまりの残念っぷりに、すぐに見切りをつけられてしまった。

……と、以上の特色を持つ者が残念な人間の代表例である。

端的に言ってしまうえば、

？何事も平均以下である

？短絡的

？趣味がない

となる。

？以降もあげることができるが、キリがなくなりそうで端的ではなくなってしまうので辞めておく。

外見も内面も最悪ではないにしろ、どう見積もってもどの角度から検討してみても並以上にはなれない。救いようがないわけではなさそうだが、ちっとも救う気になれない。一八〇度、いや、三六〇度とありとあらゆる方面から検分してみれば一握りの魅力が見つかるかもしれないが、彼の残念オーラの前ではその魅力も指のあいだからさらさらと流れおちる砂のごとく、ことごとく失せてしまうわけである。五四〇度くらい回ってみれば手の平のうえにミミズの糞くらいは残せるかもしれない。しかし、ミミズの糞は畑に対して類稀なる肥料となるが、彼の魅力がなにかの肥料となるかと聞かれれば、はて、首をひねるしかない。

なににせよ、趣味がないというのはいただけでない。趣味というものは、家族構成・青春時代・仕事に並ぶ、人格を形成するうえで重要な四大要素の一つである、とXは聞いたことがある。ちなみに、この四大要素に基づく人格形成論を唱えたのは模範的残念人間の友人の安尾文武である。安尾性の者には申し訳ないが、ちっぽけそうな苗字のわりに、安尾は多趣味であった。趣味が多いというのはすこぶる良いことだ。しかし安尾はまだ働いていない。大学に在学中である。ならば人格形成論は成り立たないのではないか、模範的残念人間はそう尋ねたが、つまりまだ人格は形成されていないのだと安尾は応えた。人格が形成されるのはそうだな、三十歳くらいになつてからじゃないか？ 安尾はそのときそういうふうにした。若いうちは人格なんてコロコロ変わってしまうものなんだ、と。Xは成る程、とそのときばかりは思ったが、安尾はまだ二十一である。三十まではあと九年も先である。実体験からなる話ならまだしも、ただの予想や他人の意見をまるで自分の意見のように語られても信

じることなどできやしない。

模範的残念人間の本名は椿幸司という。椿という苗字が呼びやすいのか、はたまた幸司という名前が呼びにくいのかはわからないが、友人からは苗字ばかりで呼ばれ、名前で呼ばれた試しがあまりない。そのせいというわけではないが、Xも椿と呼んでいる。呼びかける際には「おい椿」と言うわけである。おい幸司、と呼んだことはないしこれから先呼ぶこともないかと思われる。幸せを司るなどと、椿には勿体ない、Xはそんなふうになんか思ったことがある。

——おい椿。

Xが呼ぶ。椿は無反応である。

——おまえ、本当にこのままでいいのか？ 毎日毎日部屋に閉じこもってばかりでパソコンを前にして何するでもなくじつとしているだけじゃあないか。なあ、お前の人生それでいいのか？

Xは月に一度は必ず椿にそういつた説教をする。しかしその説教が効果的な影響をもたらした試しは今のところ、一度もない。もしも影響があるとすれば、説教の内容からするにきつと良い影響に違いないのだとXは信じて疑わない。そうでもなければ毎月のように説教などするはずもない。だが、もしも影響があれば月に一度の説教はそれきりとなるはずで、そいつはちよいとばかり寂しい気もする。Xのような事情を持っている場合、理由を見つけて話しかけるというのはなかなか大変な作業なのである。

説教の効果が表れない理由は、なにも椿が頑なに他者の話を聞かない性格なのだということではないし、Xの説教のタイミングが悪いというわけでもない。鼻歌を歌いながらパソコンでインターネットの巡回サイトのチェックをしつつ昼飯のカップラーメンをすすっている最中に説教をすることもない。それに、椿は怒られれば自分なりの解釈をしようと多少なりとも考えることはする。毎月恒例の行事なのだが効果がないのである。説教の内容が悪いということも考えられなくもないが、そんなことをXは信じない。まあ、問題は

椿にはなく、Xの状況の不備にあるのだが。そして今のところ、Xにはその不備の改善をすることはできない。残念ながら。

安尾とキョウコ 2

安尾が彼女とふたたび出会ったのは、椿から扇風機を譲り受けた翌日のことだった。昼前のことである。窓から射す陽射しが安尾のまぶたを強く刺激してはいたが、彼が目覚ます様子はなかった。徹夜明けで床に就いたばかりであった。

彼を叩き起こしたのは激しく叩かれるドアの音であった。叩かれるのがドアではなく安尾であったのなら、それこそ文字通り叩き起こされたと言えるであつたろう。だんだんツ、だんツと強く大きな音に、安尾は目を覚ました。その音には焦燥の色が含まれていた。その音を聞いた者は、なにか尋常ならざることが起こったのではないかと、そう思わずにいられない。

飛び起きて玄関のドアを開けよう、布団の中でそう思った。しかし床についたばかりだったため、あまりに眠く、立ち上がるのが億劫であつた。布団の中でいやいやと駄々をこねるようにもぞもぞうごうごする。

だんだんツと再びドアが叩かれる。

ドアをたたく輩には、人の安眠を妨げる権利があるのだというのか。もう昼を迎えているというのに安尾はそう思う。外の輩はドアを叩くことを辞めようとしな。しつこい。まるでドアを叩くことに使命感を覚えた犬のようである。ハッハッハと息を荒げながらドアを叩き続けるのである。気味が悪い。億劫だが、ドアを開けて犬を追っ払うことにしよう、安尾はそう決めた。

が、どうやら起き上がる必要はなかったようだった。

ガチャ、という硬質な音がし、ドアの開く音が続く。

びっくりして飛び起きる。部屋主に断りなくドアを勝手に開けられたのだ。近頃の間人は勝手な行動が多すぎる。勝手に部屋に上がりこむ幽霊だとか勝手にドアを開ける犬だとか。

ドアのほうを見た。思わず、うなってしまう。同時に、ドアが開

いた理由を理解した。

女がいた。それも、ドアからこちら側——部屋のなかにだ。強風に煽られた綿毛のように、眠気が一気に吹き飛んだ。

女は、あの女だった。あの幽霊だ。いやいや幽霊だと決まったわけではないが。

なんだなんだなんだなんだ？

安尾の頭の中は「なんだ？」でいっぱいになった。安尾のポンコツ脳メモリでは目のまへの現状を処理しきれない。バグが発生している。いや、エラーだ。エラーである。ピーピーピー。大変である。目のまえで不可思議なことが起こっているためエラーが発生し、信じられないものを見ているつもりになっているのだ。

「ああ、ありがと。それじゃあね」

と女は言った。

安尾からは見えないが、ドアの向こうに誰かがいるようであり、女はその誰かに話しかけたようだった。

喋った。

安尾は驚いた。己の脳が生み出したエラーあるいは幽霊が喋ったのである。いや妄想の住人が喋ってはいけない、幽霊が喋ってはいけないという道理はないが、なんというか、「ああ」「ありがと」「それじゃあね」という少ない言葉がなんとも日常的であり安尾をいくばくか落ち着かせた。あまりに人間味を帯び過ぎていた。

女が部屋のドアを閉める。その動作でさえも、安尾の城を、やはりというかなんというべきか、我が物顔に見えて仕方がない。

安尾はどうしていいかわからずにぼんやりとしていた。女は昨日と同じく、身体の線がよく出るピンクのＴシャツを着て、身体つきに似合うデニムのズボンをはいている。女の姿は現実的だったし、先ほどの日常的な言葉のせいで恐怖はあまりなかった。

安尾が何もせずじつと女の様子を見てみると、ついに女が視線に気づいたようだった。女は束の間、不思議そうな顔を見せるも、ややあつて肩越しに背後を振りかえった。まるで安尾がじつと見て

いるものは背後にあるとも思っているかのように。不思議なものは女自身だというのに、犯人を背後に探している。眼鏡を額にかけたままメガネメガネと呟きながら地面を手探りしているようなものだった。見当違いもいいところである。

探すことを諦めたのか、女は安尾を振りかえったが、特になにも言わずに窓のほうへと歩いて行く。窓を背もたれにして座り込み、安尾をじつと見る。安尾も女をじつと見たままであつたため、見つめあう形になった。それだけで安尾の胸はぎゅんぎゅん躍り出した。倒れてしまうのではないかと思うほど、動悸がする。どくどくと血流が激しく流れるのを感じる。うおおおと少年漫画風に擬人化された血流を、ついイメージする。とてもオトコ臭い。

「な」と安尾は口を開く。無言で見つめあっていることに耐えきれなくなつたのだつた。「なんでしょうか」

しばらくのあいだ女はなにも応えなかった。が、やがて「あれ？」と言つて首を捻つた。

「もしかして今、わたしに言つたの？」

もしかしなくともそのつもりであつた。

安尾はなにか言おうと口を開いたが、言葉が思い浮かばなかったため、口を開けたまま頷いた。舌を出したままでついそのことを忘れてしまった猫のような、非常に間の抜けた姿であつたが、あまりに驚いてしまったために二人とも気がつかない。

「つていうかわたしのこと見えてるの？」

見えているもなにも、見つめあつたではないか。

「えっと」と安尾はようやく言葉を思いついた。「幽霊さんですか？」

その言葉に、女はぷつと吹き出す。

「幽霊さんですか？ はい、幽霊さんですー」

うひひと口角をあげて明るく笑う女。

気持ちよさそうに笑うんだなあ。

安尾は女の笑顔を見てそう思った。胸の奥が、ココアでも注いだ

かのようにぽかぽかと暖かくなる。

「幽霊さんですか？ うひひひー、ツボだわこれー」

現実離れという言葉があるが、ついに腹を抱えて笑いだした女の姿はその言葉の真逆である。現実じみている。まるで幽霊には見えず、普通の笑う女に見える。

奇奇怪怪な容姿で現れたり、静かにじっと見つめてきたり……安尾のなかの、おどろおどろしく人を恐怖に追いやる幽霊像がガラガラと崩れ落ちた。代わりに建てられた幽霊像はといえば、抱腹絶倒を文字通り体現したような女の幽霊だ。像の足元にはこう書かれている。『怖い卒業！ 来たれ、新時代の幽霊！』忠犬八公よりもメジャーな待ち合わせ場所になりそうだ。すくなくとも安尾はそこで用がなくとも待つだろう。

なににせよ、笑う女はとても素敵だった。素敵という言葉では表せないほどステキだった。

女の口から覗く白い歯。楽しそうに揺れる肩。涙でも出てくるのではないかと疑うほどギュッと睨られた目じり。

うわあ。やっべ、かわいい！

安尾は息苦しささえ感じながらも、そう思った。なにをしたわけでもないのに頬がほんのりと赤みを帯びる。

「ごめんごめん」安尾の頬を羞恥と勘違いしたのか、女は腹を押さえながら手の平を振るった。「あんまりにも面白いこと言うからさ」

「そりゃ光栄です」

安尾は態度を決めかねて、つつい硬くなってしまう。

その態度を、揶揄されて腐ったのかと勝手に思い込んだのか、

「ごめんってば。この通り！」

両手をすり合わせながら拝むようなポーズをとる。

幽霊が拝んでいる。

楽しそうな女を、もっと楽しくしてやりたくて、安尾はつい口を開けた。

「なむさん！」

安尾の声に、女は両手を離してぽかんとした。
はずした。

女をさらに笑わずどころか、あたたかく和んだ空気に冷たいトゲを差してしまったと思った。藪蛇だった。

が、直後、女は己の両手を見つめ、ついで安尾を見つめ、納得がいったというような表情を作り、パン！と手の平を合わせた。

「なむさん！」

真剣な顔で女が言う。

数秒後には、なっはっはっは、と女の笑い声が部屋のなかを反響した。

安尾はといえば、女と見つめあってしまったことでドキマギしていたため、女に合わせて無理にでも笑うしできなかった。

安尾とキヨウコ 3

女はキヨウコと名乗った。自称幽霊。自称というのは、幽霊なのだということを立証できるかどうか分からないからだそうだ。そもそもキヨウコ自身でさえ、自分が幽霊なのかどうかわかっていない。自称だけでなく、他称も幽霊なんじゃないか、と安尾は思う。

それと、キヨウコの姿が見えたというのは安尾で二人目だそうだ。「とは言っても、もしかしたら他にも見えている人がいるのかもしれないけどね。ほら、あたしつてばあんまり幽霊っぽくないじゃない？ だから例えば街中であたしを見ても『おやつ？』って一瞬だけ気にするくらいで、なんとも思わないのが普通だと思うんだ。街中で合うだけじゃ、通りすがりの通行人つてだけ。通りすがりの通行霊をさア『あつ、幽霊じゃーん、めつずらしーい』だなんて気が付ける人はそうそういないでしょう？」

でしょう？ だなんて言われても、そんな人にお目にかかったことなど一度もない。それでも安尾はうんうんとうなずいてみせた。「だから特定の条件じゃないと幽霊かどうかなんて判断できないと思うんだ。たとえばほら、この部屋に住んでみて、そこで初めてあたしを見えているんだと確認するみたいに」

うんうん。

「いやあ、それでもさ、あたしが見える人にまた会えるなんて思わなかったよ。この部屋に越してくる人が鈍感なのか、あたしが見えにくい部類の幽霊なのか、そんなの知らないけど、あたしのことが見えない奴ばかり住むんだもん」

つまらないよねー、と言う。

見える部類の幽霊、見えにくい部類の幽霊。そんなものいるのだろうか。見える部類の幽霊にはあまり出くわしたくないものである。安尾はぼんやりとしていたが、キヨウコはやたらと喋った。お喋りな幽霊。そんなものもあるんだなあ。幽霊が喋る幽霊と言えば、

「こんな顔オ？」とおどろおどろしい声で問い詰める、真っ白な顔ののつぺらぼうが思い浮かぶ。口もなにも、発声のための器官が見当たらないのにとやあって喋っているのだろうか。人体の不思議である。そう言えば、「あたしキレイ？」の口裂け女は漫画だと美人さんが多い気がするなあ……などと楽観的に考えられるのも、初めて見た幽霊がキョウウコであるせいだろうか。二人目には出会いたくないものである。

キョウウコは身ぶり手ぶりで大袈裟に話す。自分自身の動きを、間違いないか確認でもしているかのようにじっと見つめながら話すものだから、安尾の表情など見ちゃいない。安尾は、一生懸命になつて話すキョウウコを微笑ましい想いで見ている。微笑ましい想いというよりも、鼻の下をゴムのように伸ばしてはいる。今にも伸びきつてはち切れそうである。

「他にあたしが見えるのつてアイツくらいだからなあ」

アイツ？ 伸ばしていた鼻の下を戻して、安尾は思った。アイツつて誰だ？ さっき言っていた、キョウウコが見えるという一人目だろうか？ 気になって仕方がない。

アイツという奴について質問しようかどうか迷っていると、

「ねえ、お願いがあるんだけど」と、両手を「なむなむ！」の形にし、頭を下げたキョウウコが言った。「……いいかなあ？」

いいに決まっていた。いや、なんのお願いだかまだわからないけれど。

道路と歩道のカゴに入ったDVDが、音をたてて揺れている。

やっぱり暑い。夕方になってはいたが、傾いた陽射しは容赦なく安尾の露出したうなじを照りつけていた。前髪の毛先から汗が粒と

なつて鼻先に落ちる。安尾は思わず瞬きした。

二つの車輪で道路と歩道を跨ぐ。ドーム上の凹凸に前輪がガタンと持ちあがる。そのショックでカゴの中のDVDが跳ねた。安尾はサドルに座りなおし、片手で重なっている十六枚ものDVDを上から抑えつけた。一番上のDVDのタイトルをちらと見る。『猟奇的な彼女』。残りのDVDも恋愛ものである。

思い出すだけで背中がむずかしくなった。

『恋愛コーナー』に佇む二十一歳の男。空いたもう片方の手にはバスケット。そのバスケットには一〇枚ものDVD。すべて恋愛ものである。安尾は一〇枚を探すために三〇分もそのコーナーをうろろしていた。

訂正。『恋愛コーナー』に三十分も佇む二十一歳の男、片手には十枚もの恋愛もののDVD。隣に彼女でもいれば周りから羨望の目あるいは納得の目を向けられることだろう。ああ、彼女と一緒に恋愛映画を観るのか、でも恋愛映画一〇本も観られるものなのか、よっぽど観たかったんだろうなあ彼女。しかし他人の目から見れば――うわアあの男の人ずっとあのコーナーにいるよ、いや男の人が恋愛もの観るのっていうことに対して偏見はないけどさ、いやいやいや！ むしろいいことだと思つよ、うん、でもさアあんな量を観ることないんじゃないかな、しかもあそこまで一生懸命選ぶなんてどうなんだろ。

さらなる訂正。『恋愛コーナー』に三十分も佇む二十一歳の男と年齢不詳の女、男の片手には十枚の恋愛もののDVD。隣にいるのは彼女ではないうえに人間でもない、たぶん。コーナーの棚を辿っていったところの曲がり角に鏡があるが、そこには男しか映っていない。つまりそういうことである。ともあれ、自分自身が観たいわけでもないのに、まるでそうであるかのように周りから見られていることだろう。実際、恋愛映画は嫌いではないが、こうしてレンタルCDショップで借りるほど好きでもない。

「あーコレ見たかったんだよねー」

キョウコはそう言ってDVDのケースを指で棚からちよいと引く。安尾は何気なく鏡を見て、キョウコが映っていないことについてぼんやりと考えようとしていた。その鏡の中で、棚に並ぶDVDのケースが独りでに傾く。安尾は慌ててそのケースを奪い取った。

「ゴメンゴメン」

んははとキョウコは笑う。

安尾はちらとキョウコを目で見、なにも言わずに奪い取ったケースをバスケットに入れた。

誰もいないところで独り言を呟く、怪しげな青年などとは思われたくない。だから安尾は、岩のくぼみに隠れた力二のようにむつつりと黙りこくっていた。本当は話したい。話したいが、世間体という巨躯の壁が立ちはだかっている。そいつは羞恥心という名前の警備員を雇っているのではなかなか壊すことができない。キョウコと話したい衝動に何度も駆られるが、我慢するしかなかった。むつつりむつつり決め込むしかないのである。だのにキョウコは語りかけてくる。こちらの無反応にはまるでおかまいなしである。むしろ、無反応という反応を楽しんでいるのではないかという疑念さえ、安尾の頭をよぎる始末だった。振り回されすぎている。なんてこつたい。自転車のうえで跳ねたのは、なにもDVDだけではない。安尾の尻と、後ろに乗ったキョウコである。キョウコは安尾の肩に手をつけて、後輪の中心にある二つのでっぱりに足をかけて立つようにして乗っていた。安尾がDVDを抑えるために籠に手を伸ばしたせいで、バランスが崩れて倒れそうになる。

パカンと頭をすっ叩かれながらも、安尾はへらへらしていた。後ろに乗ると言いだしたときは、小さいながらもちゃんと自己を主張している二つの丘が背中中にむりと当たるのではないかと期待しているのに、いざ乗ってみれば密着したのは肩に体重をかけるキョウコの手だけであった。残念無念という気分にはなったものの、それがなんであれ、触れているだけで嬉しかった。着眼大局。広い目をもつてすれば、細かいことも大事であった。つまり、胸が当たればそ

りやあ嬉しいに決まっているが手だつて重みを感じられるので十二分に嬉しいものである。そういうことにしておく。

椿とX 2

Xが自我を意識し始めたのはいつの頃からだったか。椿が産まれた頃からだったかもしれないし、椿が物心ついた頃からだったかもしれない。

いつだってXは椿と共に生きてきた。しかし椿が幼い頃のことをあまり覚えていないのと同じように、Xも昔のことを思い出すことができない。ただ、Xが椿と共に生きてきたのはそうと望んだためではない。望むとも望まないと関わらず、椿と共に歩むべき存在としてこの世に発生したのである。たぶん。

Xは椿のことを知りつくしている。本人よりも知っていると言っても良い。いわば、生ける椿の情報の城である。しかしマニアではない。Xは、なにも好んで椿なんぞの情報を得ようとしているわけではない。そんな情報を得たところでなんにもなりはしない。知りたくもないのに知ってしまうのであるし、見ようとしているわけでもないのに見えてしまうし、聞こうとしているわけでもないのに聞こえてしまう。目や耳を背けてもXにしみ込んでくるというわけだ。Xは己の自我を、この世の存在としては確固たる不動のものとして認めていた。が、己の存在には疑問を持っている。

いったい俺／私／ぼく／あたしはなんなのだろうか。何網何目何科なのだろうか。それはXが考えるべき第一の重要なテーマであった。第二のテーマは椿の人生についてであるが、重要ではないので割合させていただく。さらに言わせてもらえば第三以下のテーマは存在しない。椿の人生というテーマが第二の地位に鎮座できたのは消去法のためである。自分の存在＞椿の人生。それだけ。ほかになし。

そもそもXは生まれてこの方、同族と出会った試しがない。あるいは、どこかで出逢っていたのかもしれないが気づくことができなかった。もしもXに同族がいたとしても、どうして気づくことがで

きただろう。眼鏡に人体スキャン機能でも付加されていれば、もしかしたら気づくこともできたかもしれない。

なぜXが椿などという取るに足らない残念人間と共に生きてきたのか。それはXが椿の中にいるからである。Xは椿の身体の中で生活をしている。椿の身体が住まいというわけである。ただし、引越は不可能だ。試したことはないが、試そうという気にはなれない。ヤドカリのごとく、椿という殻を捨てて新しい家を手に入れることができればどんなに素敵なことだろうか。

幾度も考えてきた自分という存在。

答えは未だ、出てこない。

安尾とキヨウコ 4

アパートに着くなり、よつと、と声をあげてキヨウコが後輪から降りた。安尾が自転車を止めるや否や、DVDの入った袋をかつさらって扉へ駆けてゆく。鍵はかけたはずだったが、その勢いたるや問答無用で扉を壊してでも部屋に侵入しかねない。幽霊だから扉をすり抜けるのだろうかと安尾が見ていると、ほいっという掛け声とともにぴよんと軽やかに飛ぶ。やや前かがみになりながら、それでもドアのすぐ手前でキヨウコは両手を広げて飛行機のように着地をする。着陸成功。尻が、まるでこちら側に突き出されたかのような姿勢だったため、ジーンズ越しにその形をまじまじと見た安尾は思わず、うーむと人類初の発見を見出した科学者のように唸ってみせた。史上比類なき素晴らしいフライトであった。

アパート横の自転車を駐輪場へ置いてあるあいだにも、はいやーくーと急かされる。はいはいと面倒くさそうに応えるも、安尾の顔はついにやけてしまっている。それに気がつき、自転車のスタンドをおろしながらふいと顔を伏せる。

だってこれは、にやけてしまうのも仕方ないでしょう？

誰にともなく心の中で弁解する。駐輪場は玄関からすすんだ先を曲がったところにあつたため、玄関のドア前にいるであろうキヨウコのことを安尾は見る事が出来ない。が、見えない場所から、はいやーくーと急かされるのである。これは、なんとも言えない素敵な気分になった。

大真面目な顔で教科書の西郷隆盛に落書きをする中学生のような心持ちで、誰にもそうと見られないよう顔を無表情にするよう努める。いやこれがなかなかに難しい。下唇と、頬の筋肉が千切れてしまっているのではないかと思う。だらりとにやけようとする顔の力とは、こんなにも力強いものだったのであろうか。

にやける顔を我慢するため、とりつくろった無表情。安尾本人は

必至だった。が他者から見れば生産性のないただの独り相撲。大柄の横綱であるにやけ乃関と、無表情花はがっぷり四つに組んでいる。今にも無表情花が寄り切りで押し切られそうな状態である。

「なににやけてんだ」

すぐ傍で、声がした。

驚いて横を見ると、強面で大柄な男が立っている。つい先ほどまで傍には誰もいなかったため

「うわあっ」

やたら大きな声を出して驚いた。

男はゆうに一八〇はあるだろう。見上げる程の大男だった。焦げ茶のサングラスをかけている。ダークグレーのシャツの袖から覗く腕は、丸太のようにたくましい。

「なににやけてんだ？ あ？」

大男はもう一度、すこみを利かせながら言う。頬に傷があったり小指がなかったりすれば、完全にそちらの世界の人間だと安尾は思ったことだろう。しかし幸か不幸か、あるべきものはそこにちゃんとあり、ないものはなかった。

いつのまにかに横綱は逃げ去り、無表情花は背中をどんと押されて舞台から消え去っていた。サーッと漫画の擬音が聞こえた気がする。いわゆる血の気が失せるとはこのことであろう。土俵に現れたのは青い顔である。

安尾は冷静に相手の出方を窺っていると――思わず何も言えずに固まってしまっていると、男はサングラスの上の眉をキュッとひそめた。ツツと舌打ちが聞こえ、安尾は飛びあがる思いをした。

「ねえ、まだー？」

キョウコの声が聞こえ、安尾はそちらに顔を向けた。大男への恐怖より、キョウコへの恋心のほうが、天秤にかければ重いと決めたようである。

「調子のもてんじゃねえぞ」

その言葉に、天秤の重みはアッサリ逆転した。恐怖側の皿がガク

ンと音を立てて降下した。簡単なものである。

サツと男に振り返る。

「え？」

大男はいなかった。列をなして横断歩道を渡る園児のように、右を左をまた右をと顔を向けるがどこにもいない。

ほんの束の間のことであつたのに、大男はすんと消えてしまったのだろうか。

まあ、百害あつて一利もないような男だつたなと安尾は思い、キョウコのもとへ、軽やかな足取りで急いだ。途中、心の内が他者に聞かれていたのではないかというよくある強迫観念的被害妄想にやられ、サツと背後を振り返つた。が、やはり男はいなかった。

ホツと胸を撫で下ろし、キョウコの元へ赴く。

撫で下ろしたはずの手を頬に当て、ムンクの叫びの絵のあの人物の物真似をすることになったのは、それから二時間も経たないうちであつた。

キョウコと共に部屋に帰つた安尾は、コーヒーを二人分淹れた。砂糖とミルクの量を聞き、マグカップをキョウコに渡した。翌日の朝も二人薄着のまま安尾が淹れたコーヒーを布団の上で一緒に飲み、マグカップに口をつけたキョウコがわたしの好きな砂糖とミルクの量を覚えていてくれたのねと感動する。

コーヒーを二人分淹れた、というところから安尾のこれからの行動計画及び単なる妄想であつたのだが、いざ実行、コーヒーを淹れようではないかというところで、キョウコに呼ばれた。DVDを早く見たいとせかすのだ。プレイステ2の蓋を開け、適当なDVDをセツトして電源を入れた。ゲーム機でDVDなんて見れるんだねえとキョウコは感心する。

映画のタイトルがテレビの画面に現れる。安尾の頭には、これからやってくるであろうめくりめく世界、いわゆるキョウコと映画を見ることにより育まれる多くの感情らが織りなす映画的妄想のタイ

トルが現れている。それが実現するためにはコーヒーがどうしても必要なキーアイテムであるような気がしてきた。甘い恋愛映画とコーヒー。そう、砂糖とミルクは不要である。淹れたばかりの、熱く苦いコーヒーこそ恋愛映画への類稀なる最高のスパイスなのだ。

安尾は戸棚をさがさそとやってコーヒーを探したが、生憎、黒や、こげ茶色の粉のようなものは見つからなかった。豆からひいたことなど生まれてこのかた一度もないので、そんな上品なものもあるはずもない。冷蔵庫を開けると、缶コーヒーの六缶セットのものがあつたのでそれを取り出した。

安尾は畳んだ布団の上で胡坐をかき、キョウコは窓にもたれるようにして体育座りをしている。二人とも、時折りカップに口をつけるくらいであとはじっとテレビを眺めていた。

映画がクライマックスを迎え始めていた頃である。折りしも、安尾の頭の中では、夕焼けを背に、安尾と男が拳と拳で語り合っていた。相手は恋敵であり、何故か駐輪場で出くわした大男であった。丸太のような太い腕で殴られた安尾は3メートル後方に吹き飛んだが、カイワレ大根のような腕で安尾は反撃し、大男を5メートルも吹き飛ばす。玄関のベルがピンポンと鳴った。

よつこらせと口にして布団から立ち上がり、玄関の戸を開ける。大男が立っていた。

駐輪場で出くわし、妄想の中で殴り飛ばしたばかりのあの太男である。

あんぐりと口をだらしなく開ける安尾を、男はギロリと睨んだ。その一瞥に明確な殺意のようなものを安尾は感じたが、その考えを否定するかのように首をぶるんと振るう。

「ど」

どなたでしょうか？ と安尾は言おうと口を開く。が、それは遮られた。

「どうもーキョウコさん！ お久しぶりですッ！」

目のまえの男の顔がくしゃくしゃと崩れ、あふれんばかりの笑顔

になった。安尾は初めて見る像の尻の大きさに驚く子どものように、さらにあんぐりと口を開ける。なにしろ、「あの人は今しがた刑務所から出たところでしてね、なに、ヒトを二人ほど、ね、チョットね」と噂されていても不思議ではない大男が、戦隊もののヒーローの口ポットを与えられた男の子のようにニッコリと破顔しているのである。そうそれはまさに文字のごとく破顔であつた。新聞紙を丸めてクシャクシャにするだけでは飽き足らず破いて引き裂いてグチヨグチヨにしたようなものである。

男は口の両端を不器用に吊り上げながら、安尾のことなどいなかのように部屋へずい、と足を入れる。

「え、ちよつと」

安尾がうるたえる。

どうすることもできない安尾の身体を、大男はどうかそうともせず、水や空気でも押しのけるかのように、自分の身体でもって押しのける。

ここ二度目の無断侵入。一度目は望ましい人物の侵入であり、二度目は望まざる人物の侵入である。

何事も良いことがあれば悪いことが起き、すぐに平坦になつてしまつんだなあと安尾はぼんやりと考える。頭のなかはとうに現実逃避の準備をはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400s/>

宿借り

2011年10月28日16時03分発行